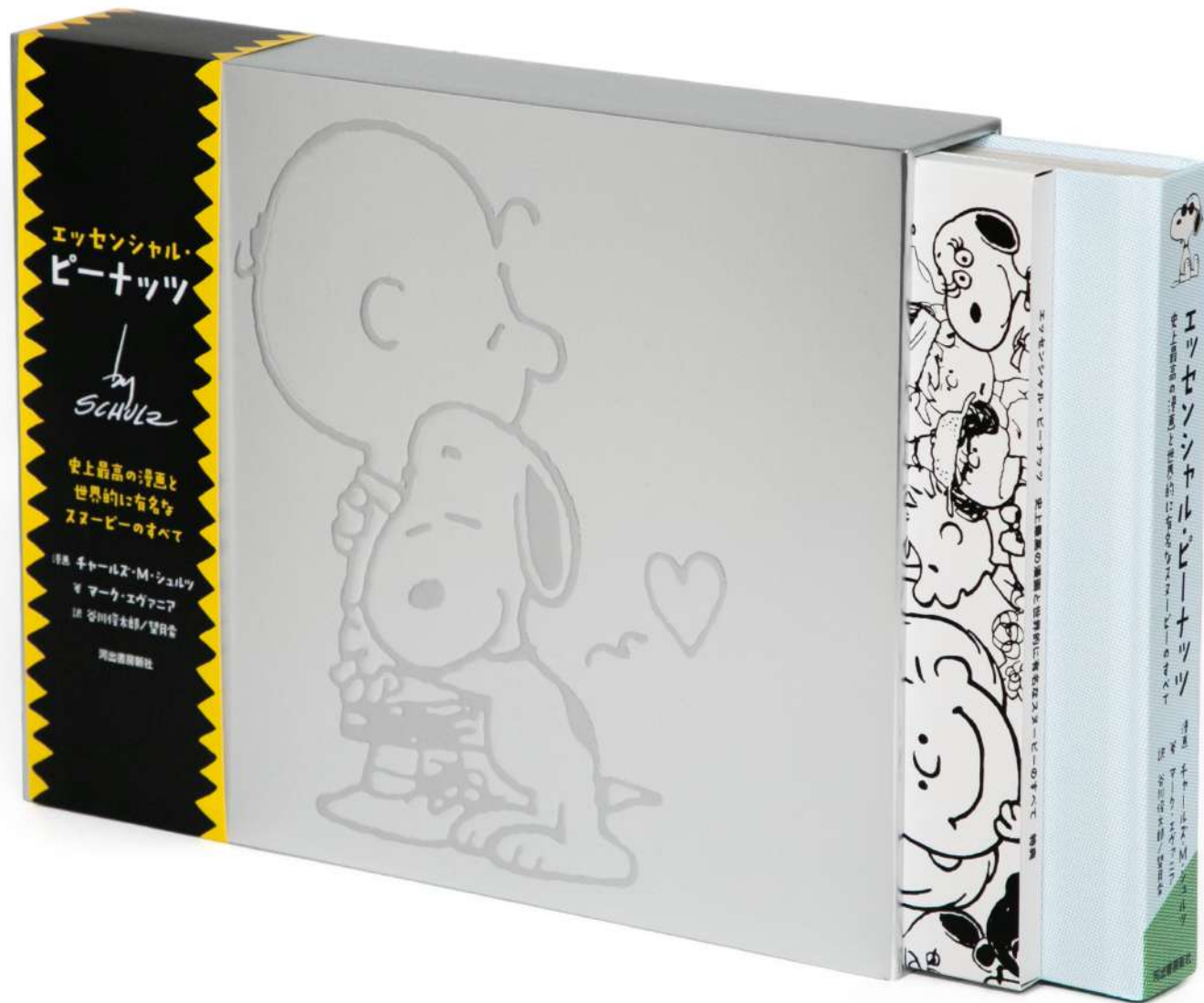




エッセンシャル・
ピーナッツ

by
SCHULZ

史上最高の漫画と
世界的に有名な
スヌーピーのすべて

著者 チャールズ・M・シュルツ

著 マーク・エヴァニア

訳 谷川俊太郎/野村浩将

河出書房新社



エッセンシャル・ピーナッツ

著者 チャールズ・M・シュルツ
著 マーク・エヴァニア
訳 谷川俊太郎/野村浩将

河出書房新社

『ピーナッツ』75周年記念 空前絶後のスヌーピー公式ブック!



『ピーナッツ』関係者の
寄稿を多数掲載!
日本からは
谷川俊太郎も参加!

重要な作品と
その関連作を
500作近く
カラーで収録!



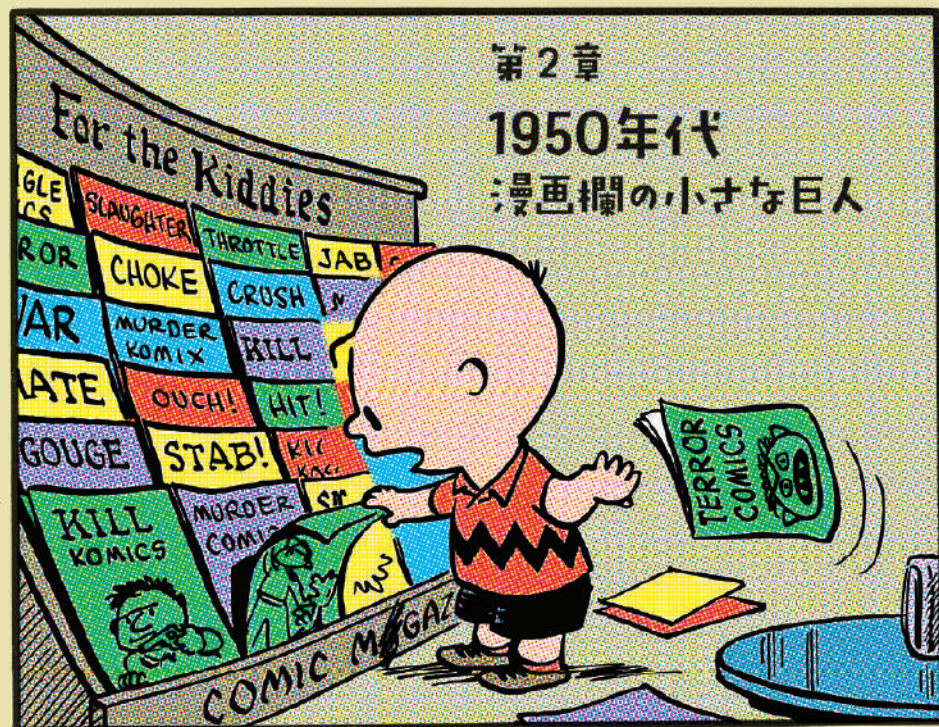
アメリカの歴史的・文化的
背景にまで踏み込んだ
充実の解説!

最高の編集委員会による総力編集!

エッセンシャル

必読作品とともに、比類なき解説、貴重な証言 多数、図版満載!!

永久保存版の記念ブック誕生!!



第2章 1950年代 漫画欄の小さな巨人

チャールズ・シュルツの新しい漫画は、新聞社への売り込みが始められる前にひとつの小さな決定を下す必要があった。タイトルの問題である。当初シュルツは「ちびっことち」にするつもりだったが、このタイトルが使えなくなった。限られた発行部数の地方紙では問題にはならなかったが、全国に配信される新しい漫画として告知された段になって、苛迫的な手紙が届いた。送りはタック・ナイトという漫画家の代理人井藤士で、ナイトは1930年代に「子どもたち」という漫画を描いていた。その漫画はすでに流通していないが、タイトルの著作権が切れていなかったのである。

別のタイトルを考えるよう、シュルツはユナイテッド・フィーチャー・シンジケート社から指示された。のちにこう語っている。「私は何も考えつかなかった。ユナイテッド・フィーチャーの指示が、あのひどいタイトル「ピーナッツ」を思い出したんです。いやなタイトルです。最初からいやでした。おもてなければ、誰もわかっていない。にげと私何でできたんだろう? セントポール出身の黄色い顔をした少年。私は「チャーリー・ブラウン」ではどうですか?」と提案した。社長は「そんなタイトルでは著作権が取れない」と却下された。だから「タンレー」や「スティーブ・キャニオン」はどうなんですか、と尋ねたが切られてしまった。私は諦めるのをあきらめたんです。

伝説によると、シュルツの隣りにいたこのタイトルは、ユナイテッド・フィーチャーの制作部長、クリス・アンダーソンが提案したもので、彼はこの新作漫画を見て面白かったという。子どもたちが出てくる漫画だと知っていたので、そこから当時大人気の子ども向けテレビ番組「ハウディ・ドゥー・デュー・ショウ」を盗襲した。ユナイテッド・フィーチャーはこの番組をミカリスした漫画を社内に配信することにはなっていた——シュルツの新作漫画と同時に告知された。もうひとつの新作漫画である。チャックの「ハウディ・ドゥー・デュー」は毎日、子どもたちが「ピーナッツ・ギャザリング」と呼ばれるステージ上の観客席に座る。試合の「バックパッカー」ボブ・スミスが子どもたちを「ピーナッツ」と呼んでいた。

最終タイトルのリストが編集部門で知られた。これよりいいタイトルがなかった……そのため「ピーナッツ」に決まった。子どもたちが生まれてくることは、シュルツがこのタイトルを思いついた理由のひとつである。彼は何度もこう語っている。「私は子どもが主役を演じることを考えていた。本当のアンは高校生以上の大人たちで、大人に子どもだっただけの想像があるから。子どもよりずっと深く「ピーナッツ」を愛読できるんです。

スパーキーがこれと復讐（そく）り間にことを経てて居たのを聞いたことがあるが、彼は「ピーナッツ」という言葉を口にするとき、わざと顔をしかめていた。当時彼は運動が盛んだった40年以

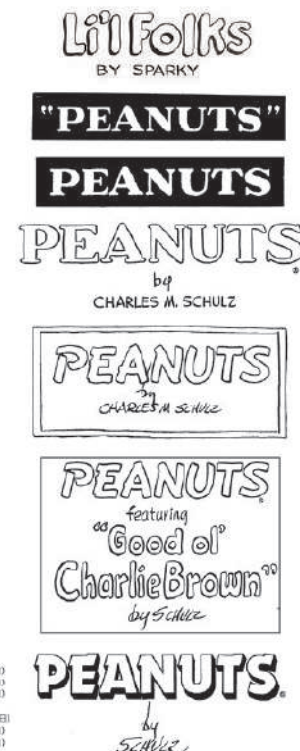
上になっていて、このタイトルが漫画の成功を助けたのは確実だが、彼の意思は生温、消えることになった。1966年11月20日、シュルツは巨額のロッキン・ストーン・「ピーナッツ」の小さな「確信」として、その下に大きな文字で「おなじみのやつチャーリー・ブラウン」と題した。「おなじみのやつチャーリー・ブラウン」は、彼が当時の主要なタイトルのひとつ。

1966年10月2日に「ピーナッツ」が最初の新聞でデビューし、まだ印刷版はなかった。週に何回もそのコマを掲載するが、いざいざも同じ大きさのコマが4のまんまだった。新聞社がこの漫画を掲載するにあたっては、4つのコマを1行に配置するが、2行に配置する。あるいは4つのコマを縦に積み重ねて掲載する。自由な裁断できた……どんな空スペースにも都合よく収まります、というわけである。

7紙の新聞の印刷は悪くなかった。「ワシントン・ポスト」「シカゴ・トリビューン」「ミネアポリス・スター・トリビューン」「アランタ・クルー・クロニクル」「バズ・グロブ・タイムズ」「デトロイト・フリープレス」「シアトル・タイムズ」。この7紙のうち2紙ばかりの大手で、他は新聞の発行部数は減りつつあった。「シカゴ・トリビューン」のような大新聞は、小規模新聞の12社に匹敵するくらいだった。

ユナイテッド・フィーチャーに不安はなかった。新聞に意欲的な営業部隊は、新聞社の編集者に連絡をとって、漫画欄に空きがあるという確かな機会があれば、シュルツの新作漫画の掲載を直向きに検討してくれるよう働きかけた。連載開始から1年後には、「ピーナッツ」の掲載数は32紙となり、これは十分な成果であった。フルカラーの日曜日の漫画欄にも連載が始まることとなった。第1回

および
1947年4月22日～1950年1月22日
1950年1月22日～1950年9月11日
1950年9月11日～1951年2月19日
1951年2月19日～1952年2月3日
1952年2月3日～1952年11月13日
1952年11月13日～1953年1月13日
1953年1月13日～1953年2月13日
1953年2月13日～1953年2月13日



豪華 特典付き!!

●別冊漫画「デル版ピーナッツ」(オールカラー32頁)

●復刻イラスト 8点

●ステッカー 5点

●ポストカード 8点

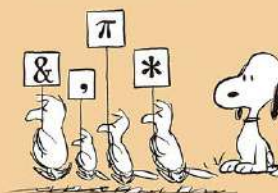
●アイロン接着ワッペン 1点



PEANUTS

by
SCHULZ

目次



はじめに しあわせをもたらすもの
パトリック・マクドナルド 1
序文 ジーン・シュルツ 5
まえがき マーク・エヴァニア 8
第1章 失敗者の顔 12



第2章 1950年代

漫画欄の小さな巨人	22
エッセンシャル選定に関する注記	30
アレクシス・E・ファハート	31
エッセンシャル・ピーナッツNo.1~18	42
『ピーナッツ』のデザイン チップ・キッド	42



第3章 1960年代

空飛ぶピーグル	22
エッセンシャル・ピーナッツ No.19~40	90
ウィンス・ガラルディのジャズが響くクリスマス	130
デリック・パン	145
フランクリンと私 ロブ・アームストロング	145
スヌービーとアポロ10号と私 マイク・マクシミーノ	155



第4章 1970年代

つねに新しく	158
エッセンシャル・ピーナッツ No.41~56	170
『ピーナッツ』単行本 ベンジャミン・I・クラーク	186
深刻な問題——チャーリー・ブラウンのコミックス	214
アルベルト・フランビッラ	214



第5章 1980年代

ジョー・シュラボニクはどこへ行ったの?	229
エッセンシャル・ピーナッツ No.57~61	236
先輩へ、愛を込めて ヒラリー・B・ブライス	237
完璧な不完全 ベイジ・ブラッドック	245
『ピーナッツ』と日本 松永秋男	250
立って、座って、寝て サラ・ギレスピー	253



第6章 1990年代

やれやれ! また名響!	254
エッセンシャル・ピーナッツ No.62~75	264
編集者の育て方 エイミー・ラゴ	267
『ピーナッツ』を読む 谷川俊太郎	278

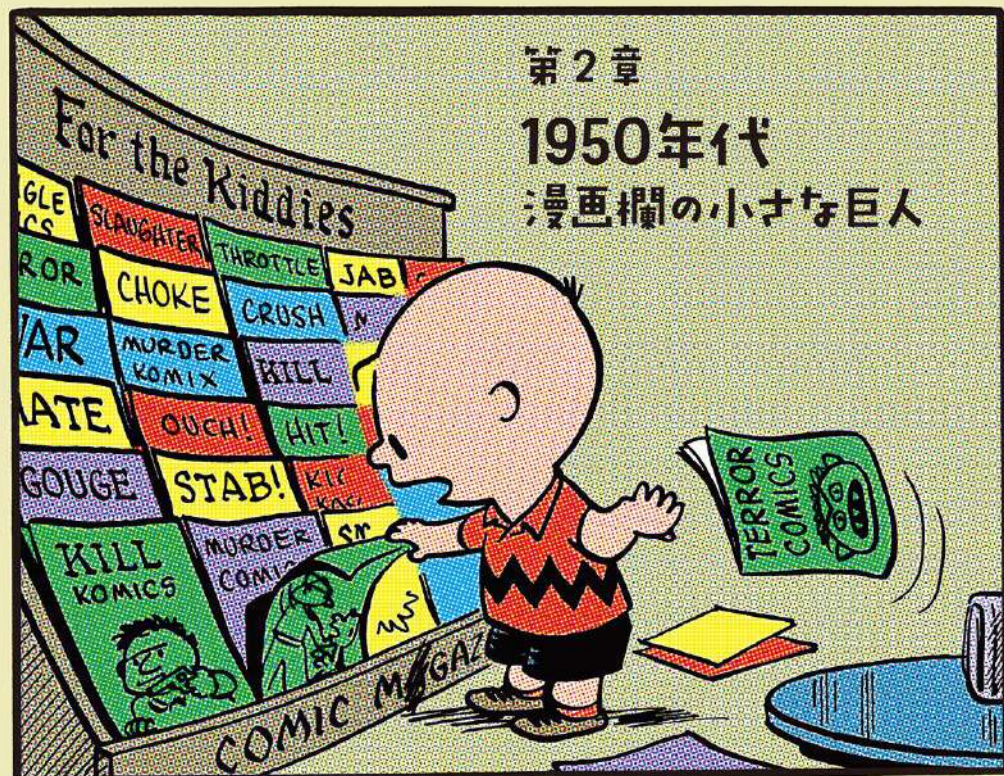


第7章 たくさんの遺産

スヌービーの喜び ロブ・ブティリエ	310
『ピーナッツ』の作曲 ジェフ・モロー	311
『ピーナッツ』サウンド ベン・フォールズ	311
チャールズ・M・シュルツ、漫画を読む	312
もっと読みたいあなたへ	316
謝辞	318



第2章 1950年代 漫画欄の小さな巨人



チャールズ・シュルツの新しい漫画は、新聞社への売り込みが始める前にひとつの小さな決定を下す必要があった。タイトルの問題である。当初シュルツは「ちびっこたち」にするつもりだったが、このタイトルが使えなくなった。限られた発行部数の地方紙では問題にならなかったが、全国に配信される新しい漫画として告知された段になって、脅迫的な手紙が届いた。送り主はタック・ナイトという漫画家の代理人弁護士で、ナイトは1930年代に「子どもたち」という漫画を描いていた。その漫画はすでに流通していないが、タイトルの商標権が切れていなかったのである。

ズ別のタイトルを考えるよう、シュルツはユナイテッド・フィーチャー・シンジケート社から指示された。のちにこう語っている。「私は何も考えつかず、ユナイテッド・フィーチャーの誰かが、あのひどいタイトル、『ピーナッツ』を思いついたんです。いやなタイトルです。最初からいやでした。品名付ければ、意味もわからない。だけど私に何ができたろう？ セントポール出身の無名な若者だったんです。私は『チャーリー・ブラウン』ではどうですか？と質問したら、社長から『そんなタイトルでは著作権が取れない』と却下された。だったら『ナンシー』や『ステイプ・キャニオン』はどうなんですか、と尋ねたかったが黙っていました。私は議論する立場になかったんです」

伝説によると、シュルツの描いていたこのタイトルは、ユナイテッド・フィーチャーの制作部長、ワイリアム・アンダーソンが提案したもので、彼はこの新作漫画を見てもらいなかったという。子どもたちが出てくる漫画だと知っていただけで、そこから当時大人気の子ども向けテレビ番組『ハウディ・ドワーディ・ショー』を連想した。ユナイテッド・フィーチャーはこの番組をコミカライズした漫画を前にに配信することになっていた——シュルツの新作漫画と同時に告知された、もうひとつの新作漫画である。テレビの『ハウディ・ドワーディ』では毎週、子どもたちが『ピーナッツ・ギャラリ』と呼ばれるステージ上の観客席に座る。司会の「バクファロー」、ボブ・スミスが子どもたちのことを「ピーナッツ」と呼んでいた。

候補タイトルがリストが編集室内で回覧されたが、これよりいいタイトルがなかった……そのため『ピーナッツ』に決まった。子ども番組に由来していることは、シュルツがこのタイトルを嫌っていた理由のひとつである。彼は何度もこう語っている。「私は子どもが主眼人物だと考えたことはありません。本当のファンは高校生以上の大人たちで、大人には子どもだったころの記憶があるから、子どもよりもっと深く『ピーナッツ』を理解できるんです」

スパークーがこれとほぼそっくり同じことを講演で話していたのを聞いたことがあるが、彼は「ピーナッツ」という言葉が口に出るとき、わざと顔をしかめていた。当初は連載が始まってからの40年以

上がたっていて、このタイトルが漫画の成功を妨げなかったのは確実だが、彼の嫌悪感は生じ、消えることはなかった。1966年11月20日、シュルツは日曜版のロゴを変更し、「ピーナッツ」の下に小さく「主役は」と添え、その下に大きな文字で「おなじみいやつチャーリー・ブラウン」と加えた。「おなじみいやつチャーリー・ブラウン」は、彼が当初から主張していたタイトルのひとつだ。

1950年10月2日に『ピーナッツ』が7紙の新聞でデビューした際、まだ日曜版はなかった。週に6作のモノクロ漫画があるだけで、いずれも同じ大きさのコマが4つ並んでいた。新聞社がこの漫画を連載するにあたっては、4つのコマを1行に配置するか、2行に分割するか、あるいは4つのコマを縦に積み重ねて掲載するか、自由に判断できた……どんな空きスペースにも都合よく収まり、というわけである。

7紙の新聞の内訳は悪くなかった。「ワシントン・ポスト」「シカゴ・トリビューン」「ミネアポリス・スター・トリビューン」「アレンタウン・コール・クロニクル」「ベツレヘム・グローブ・タイムズ」「デンバー・ポスト」「シアトル・タイムズ」。この7紙のうちの2紙はかなりの大手で、掲載料は新聞の発行部数に基づいていたから、「シカゴ・トリビューン」のような大新聞ならば、小規模新聞の12社分に匹敵する支払いになった。

ユナイテッド・フィーチャーに不安はなかった。職務に忠実な従業員部隊は、各新聞社の編集者に連絡をとって、漫画欄に空きが出るという機会があれば、シュルツの新作漫画の掲載を前向きに検討してくれるよう働きかけた。連載開始から1年後には、『ピーナッツ』の掲載紙は35紙となり、これは十分な成果であったため、フルカラーの日曜日の漫画欄にも連載が始まることとなった。第1回

上り
(1947年6月22日～1950年1月22日)
(1950年10月2日～1956年3月19日)
(1956年5月21日～1977年2月19日)
(1952年1月6日～1952年2月3日)
(1952年2月10日～1952年11月13日)
(1966年11月20日～1967年1月4日)
(1967年1月11日～2000年2月13日)

Lil' Folks
BY SPARKY

"PEANUTS"

PEANUTS

PEANUTS

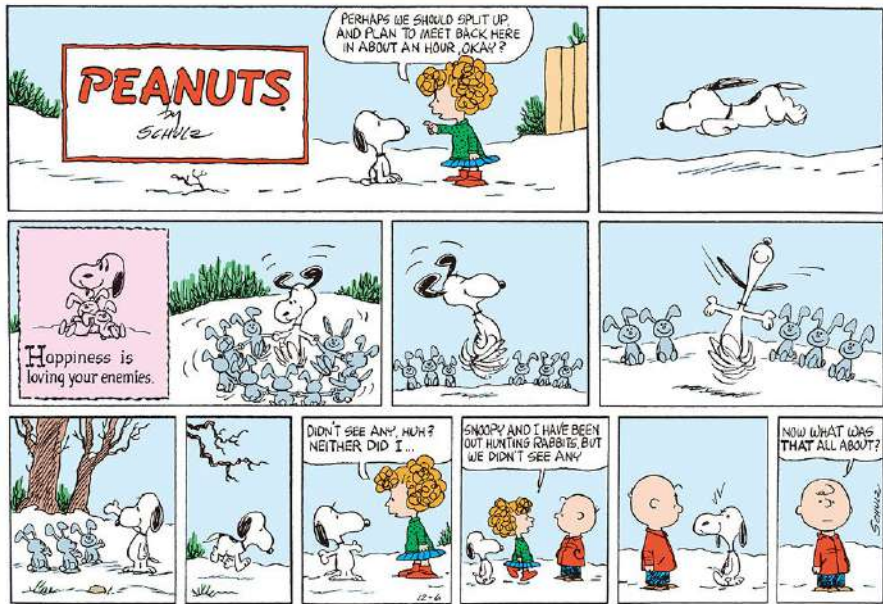
by
CHARLES M. SCHULZ

PEANUTS
by
CHARLES M. SCHULZ

PEANUTS
featuring
"Good ol'
Charlie Brown"
by Schulz

PEANUTS

by
Schulz



スヌーピーがときどき二本脚で歩くようになったころ、「ハッピーダンス」は突然現れた。なぜそうに踊るスヌーピーの姿が読者の心でシンボルな喜びの表現は、「ピーナッツ」には——それどころか新聞の漫画欄のどこに現れても——存在しなかった。踊る理由はとくにない。今日は大団円だからというだけで踊る口実になっている。スヌーピーはときに落ちこんだり不機嫌になったりもするが、せいぜい夕食が遅れたとか、メニューが好み合わないとかいう程度のことだ。ほとんどの場合はのきな子犬で、悩みといえは空想の中で生じた心配ごとが悩

むくものである。それは、他のキャラクターたち、とりわけチャーリー・ブラウンの不機嫌そうな気分とじつに対照的だ。シュルツは、こうしたダンスを振るのが大好きだった。1970年、『ピーナッツ』20周年を記念して、テレビのトーク番組「マーズ・グリフィン・ショー」にゲスト出演したとき、大きなイーゼルと画板が用意される。司会のグリフィンから、では観客とカメラの前で、なんでもいので好きなものを描いてくださいと頼まれた。彼とんだの漫画家はこうした依頼を嫌がるが、シュルツは前に進み出ると、あっという間に、

①制作されたほうがいかに。約1時間半にここで会うことにしよう。いいね？ ②「しんせは次の敵を投すること」③「見つからなかったの？ おたしらよ」④スヌーピーとウサギ狩りに行ったんだけど、1匹も見つからなかったの ⑤どうなってんの？ (1964年12月6日)

楽しそうに踊るスヌーピーを振きあげた。そのときのシュルツはスヌーピーと同じくらい楽しんでいるように見えた。グリフィンはその絵をこっそり持ち去るようなくまで腕に抱えこむと、こう言った。「おっと、大金を手に入れたみたいだね……」



①これはほくほの「5月1日」ダンス
②「5月1日」ダンスとはほんの少しだけ違ってるし、「5月の日」ダンスともほんの少しだけ違うんだ……
③舞人という、ほくほですら区別するのがむずかしい……
(1969年5月1日)



①これはほくほの「5月2日」ダンス
②「5月1日」ダンスとはほんの少し違って……
③ほくほのダンスはみんな同じに見える……
④つまり舞人にはね！
(1969年5月2日)



④秋に夢中なんだ！
(1969年10月27日)



①これはほくほの「新年あめでう」ダンス
②佳きとしを想うものにとって素晴らしい一年になることを心より祈る、その裏返し……
③ただし、猫は別！
④ヒーヒーヒーヒー！
(1971年1月1日)

「本が読めるようになりました」
「英語の勉強ができました」
「父が暴力を振るったときの避難場所」
「おかげで漫画家になりました」

1 チャールズ・M・シユルツ美術館とリサーチセンターで最大の見どころは、間違いなく、地味な本館の一角である。そこに古びた「ビナツァ」のペーパーバックが並び詰められている。もとどりの青表紙は青苔や黄色い汚れで、表紙はぼろぼろだが、大人の「ビナツァ」ファンにとっては思ひ出の味を押し寄せる場所だ。このコメントは有名・無名を問わず、来館のみなさまから長年にわたって私が耳にした言葉のほんの一節だ。

『ピーナッツ』初の単行本は、1952年7月、ラインハート＆カンペンニ社から刊行され、編集長であるジョージ・セルビーが主導して発売された。セルビーはもともと漫画家はあまり読まなかったが、ピーナの演義とブリッジが大好きだった。毎日、新聞のブリッジのコラムを読んでいたところ、ある日、手書きで完璧に写された短く正確な文章が載った漫画に目があった。ピーパーンの曲だと気づいて、好奇心が湧き立った。その漫画を読み始めた。当初、連載開始から2年かかっていなかった。

比較的まで進んでいてもなかなか漫画になつたが、ランハート氏は600枚の、140ページを超える原稿のミッドバックに、たゞ「第8巻の『ビーンツ』の漫画からこの漫画があつた。これをそれがないアイデアだと愚かしくしても、そのすべてをその形式で再掲載することは不可能だ」とシュルツの生涯において、何千もの『ビーンツ』の漫画は、新聞に印刷されたにだけ、二度と再掲載することにはなかつた。一部の漫画は、シュルツの二、三枚の原稿の発見や性格の悪化に化して、古いバージョンを差し直し本に掲載すると読者を混乱させるだろうと、考え、再掲載されなかつた。多くのクリエイティブな人々と同様、シュルツもつねに最新の仕事に没頭するようだ。

その最初の単行本が発行された当時、『ビーナッツ』を掲載していた新聞は40紙しかなかった。しかし、ラインハート＆カンパニー社による流通により、『ビーナッツ』は、まだこの漫画が掲載されていなかった町を含む、何千人もの読者に届けられるよ

うになった。その最初の単行本が2巻、3巻、4巻、14巻、そして30巻と重版を重ねるうちに、何十万部もの書籍が流通し、ファンは禁煙し、新聞も注目するようになった。1968年に、おそく最終版と思われる書籍が書店に並び、1000以上の新聞が毎日および日曜版で『ピーナツ』を掲載した。チャーリー・ブラウン、スヌーピー、そして仲間たちは、史上最長の漫画キャラクターの殿堂にしっかりとその名を刻んだ。最初の作品に続き、さらに多くの作品が発表された。

1980年代前半。スタンプアート・イラスト・カンパニイなど、竹中へも定着していったなかで、シムダの「社会生活自伝本」(竹中)だと考えていてもいい。確かにこの本のなかで「ついでに」が作られた。また、やがてあきらみに告げられた。『エーサー』を編集する関係者にも現れるにすぎず、単行本は出さなかった。単行本が出版されるにつれて、『エーサー』を編集する関係者も増えた。2000年12月にシムダが亡くなるまで、彼が愛用する筆を約2000回以上62回、毎日の執筆は約5500文字と推定されている。何回も何回も読んだ西宮南子の『ペーパーバックのコレクション』も、その関係者数に数えられるほどの読者の数と推測することになる。

リサーチセンターキュレーター



フォーセツト・クレスト社版『ピーナッツ』のペーパーバック全100巻の表紙。1962年刊『ピーナッツのすてきな世界』から1993年刊『家内よろしく、スヌービー』まで。この時代、どのうちでも子どもの寝室の床にはこれらの本が散らばっていた。

まえがき

マーク・エヴァニア

いつもそこにあった。チョコレート、日の光、音楽、色、そうしたものと同じように、『ピーナッツ』はいつもそこにあった——少なくとも、私の世代（私は1952年生まれ）やそれ以降の世代にとってはそうだった。これらのものがそこにあることに、いつ、どこで、初めて気づいたのか、まったく覚えていない。みなさんだってそうだろう。気づいたときには、自然界に不可欠な要素のように、ただそこに楽しそうに存在していた。私たちに必要だと考えた神様が与えてくれたものであるかのように。



4 チャールズ・M・シュルツという人物による漫画『ピーナッツ』は、1950年10月2日、いくつかの（多くはない）新聞に初めて登場した。主人公のチャーリー・ブラウンとその生みの親と同じように、この漫画も静かで控えめな存在だった。当時の漫画に気づいた読者はおそらくお茶を淹れただけ程度だっただろう。

ときどき新しい新聞漫画が現れるが、(a) 短期間で消える、(b) 永遠に続く、(c) いくつかの巻をたどる。この新しい漫画が永続的な地位を獲得することになるとは思えなかった。少なくとも、この漫画を見つけた人にとって、最初の1週間はそうだった。

というのも、『ピーナッツ』は『リトル・アプナー』『プロンディ』『ディック・トレイシー』など不朽の名作漫画と並んで漫画欄に載っていたわけでは、必ずしもなかったからだ。ユナイテッド・フィーチャー・シンジケート社の社員の発案で、シュルツの新作漫画は他の漫画よりも小さいサイズで販売することになったのだ。たぶん、小さな「場所をとらない」漫画ならば、新聞の他の欄——漫画欄以外——の編集者がそれを載せる余地を見つけてくれるのではないかと、という理屈があったのだろう。

それはマーケティング上の決定だった……この決定を下した配給会社の人々は、シュルツが望んでいたタイトルを兼ねて『ピーナッツ』というタイトルにしようとした天才と、ひょっとしたら同一人物だったかもしれない。私が漫画に登場する子どもたちと同じ年ごろだったときでさえ、どうして『ピーナッツ』なのにピーナッツが出てこないのか意味がわからなかった。故母のドットは、ピーナッツはチャーリー・ブラウンの犬の名前だと思っていた。その犬が名ばかりの飼い主をきく他の種よりも注目を集めるように

1951年4月17日の新聞の漫画欄、『ピーナッツ』が自然な形で登場している。漫画でもっとも小さな漫画だったため、シュルツは、当時の同時代の漫画家たちがよく用いていた、縦や横のレイアウトを使う余地がなかった。シュルツは連載をしながら新しい漫画のスタイルを生み出していた。注目すべきは、ここに掲載されている『ピーナッツ』はエッセンスシャルNo.3（33頁）として本書に収録してあるものでありたい。

なる、ほのか音のことだ。

しかしタイトルがなんでもあれ、掲載のされ方がどうあれ、すぐに読者はチャーリー・ブラウンと仲間たちと犬（名前はピーナッツじゃない）のことが好きになった。読者契約を結ぶ新聞社も増えていった……徐々にではあるが、当時、新聞社が新しい漫画を載せようと思っても即断できるものではなかった。新しい漫画を載せようとなれば徐々に、従来の漫画の掲載を打ち切ることを意味し、そうすると激怒する新聞読者が現れるのがつづだった。簡単に決断はできない。

ひとつ例を挙げよう。1974年、私はサンディエゴのエール・コルテス・ホテルで開催されたサンディエゴ・コミコンに参加した。毎年に一度のこのイベントは現在ではコミコン・インターナショナルと呼ばれる、事実上、サンディエゴ会場で開催されている。あの日の会場で、友人のラッセル・マイヤーズと話していた。ラッセルは漫画『フルム・ヒルダ』の作者として、コンベンションの特別ゲストだった。（ラッセルはいまどうしてる？ 半世紀たっても『フルム・ヒルダ』を描き続けている）

あのときの漫画界最大の話題は、どこかのさる地方紙が悪戯にアーニー・ブッシュミラーの長編漫画『ナンシー』の掲載を中止すると決めたことだった。怒った読者たちは即座に意図表明した。ビッチフォークを突きあげ、燃える松明をかけた、被害予告を出し、さらにはあるところか、新聞の定購購読を中止したのである。命の危険を覚えた新聞社の編集者はすみやかに『ナンシー』を復活させ、弁償可能な断片を下したことについて謝意に満ちた。

『ナンシー』を掲載している新聞は何故かういさるのかラッセルに尋ねたところ、彼は知らなかったが、そのとき、たまたまそばを通りかかった男性に目を留めた。「スパーキーは同じ配給会社だ」とラッセルは言った。「知っているじゃないか」。その通行人を呼びとめると、私のことをチャールズ・M・シュルツ——友人たちから「スパーキー」と呼ばれていた人物に紹介してくれた。彼もコミコンジャン

Nuggets of Humor to Enrich Any Page of Your Newspaper

Ideal for front, editorial, classified or regular comic pages.

Solves tough make-up problems. 3 or 4-col. horizontally, 1 col. vertically. 2-col. panels.

Clever, subtle humor with universally appealing characters.

Wire for your rate today.

2-col. Panel

SO YOU SEE THIS PROVES THAT OUR EARTH IS ROUND LIKE A BALL... LIKE A BASEBALL? SURE, LIKE A BASEBALL. LIKE A BASKETBALL?

SURE, JUST LIKE A BASKETBALL. I DON'T BELIEVE IT! WHY? NO STITCHES!

ROOT BEER FOR SALE

FLOWERS FOR SALE

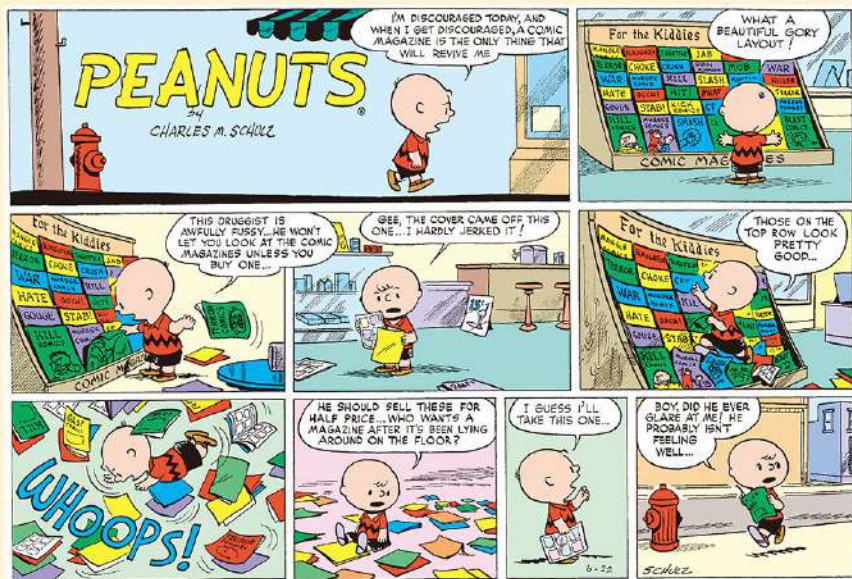
LEMONADE FOR SALE

BONES FOR SALE

3-col. Horizontal

C'MON, GIMME A BITE! PHOOIE!! WHAT KIND OF ICE CREAM IS THAT? I DIDN'T SAY IT WAS ICE CREAM. IT'S MASHED POTATO!

新聞の空きスペースに応じて、この漫画はいくつかの異なる方法で掲載された。これは、1950年頃に、新聞作品『ピーナッツ』を宣伝するために新聞編集者に送られた、ユナイテッド・フィーチャー・シンジケートの告知チラシの内容だ。



1952年、コミックブックがニュースで大きく取り上げられた。エステス・K・フォードという院議員や、『精神の惑惑』の著者である他に衣蓋せぬ心理学者のフレデリック・ワース博士など活動家たちが、『漫画』には「面白」ところは尠くなく、感性的に強い害害の心にある害害の害をもたずと主張し、検閲委員や全面的禁止について議論が生まれたのである。2年後には上院公聴会が開かれ、その結果、大手出版社は自ら主決機関開いた。コミックス検閲規定草案は全米自由新聞協会の援助で、毎巻のこのコミッ

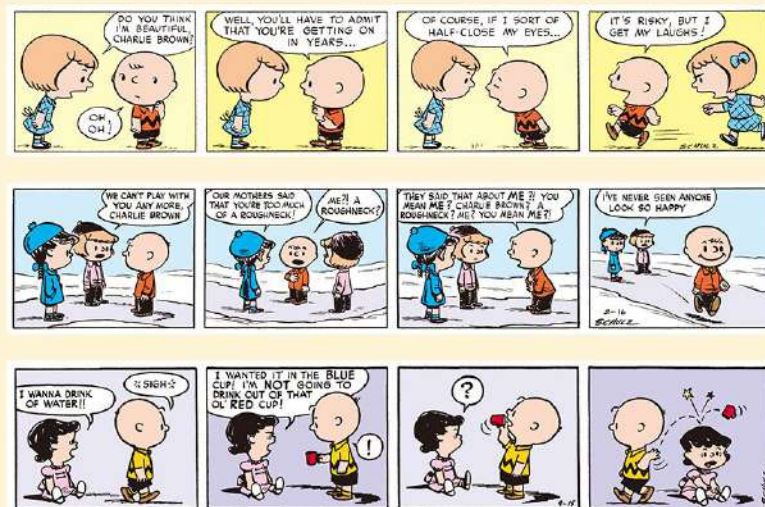
クワック愛好家にして蒐集家のシュルツは、この問題についてひとことと言わねばならなかった。

シュルツが気に入るコミックブックは——そうした中には『ピーナッツ』を再読するものもまもなく現われ、のちにはコミックブック版の『ピーナッツ』も出版される——直線の攻撃対象にはなっていないかった。対象にされたのは、その内容に反したどきどきタイトルのコミックブックで、ここでチャーリー・ブラウンが描かれているのにたいへん驚いてる。CHOKE (喉)、KILL (殺す)、HATE (憎悪)、STAB (突き)……ここから離

判された書棚には、「どこでも向け」とある。これは一連の問題に対するシュルツの強い意思を表したかったかもしれない。あるいは、陳列を見て「並んで、並んで、すべいのが！」と言うチャーリー・ブラウンにその意を託したのだろうか。

この日曜版は、地味版で上段を省いて薄暮報されてしまった面白さが半減してつまらない作品のひとつである。それはときに選べられないことだが、『ピーナッツ』の人気が高まるにつれて、作品までもことごとく新鮮な価値が増えていった……そしてしばしば『日曜版の別冊新聞紙のトップページに載るようになつた。

⑤ びく、今日はユウタなんだ、どうしてさーま
ンがでかいにかなるよ
空澄さん、喜んでる。す
こいのび
⑥ この部屋がましなんだ
一貫ねきユウタを見
せてくれんだー
⑦ あつ、お姫がそれやっ
た一びつりもしなかつ
たのよ
⑧ 一番上の判のけ面白そ
うだー
⑨ おつとつと！
⑩ かなんか頭にしたいや
ー涙のしに散うばつた
話読んで貰うほしくな
いのね？
⑪ これをもらいたいだけ
と
⑫ おおやあ、すこいでめ
でたのでしょ！さっさと休
めたいんだろ？
（1952年4月27日）



①わたしのこと美人だと思う、チャーリー・ブラウン? / やれやれ!

②そうだね、きみが年をとってきてるのを自覚しなくちゃね…

③もちろん、薄顔で見れば…

④危険にだけ、笑えるな!

(1951年2月14日)

①もうあなたとは遊べないわ、チャーリー・ブラウン
②わたしたちのママがあなたならず者だって！／ぼくが引ねるぞ？
③ぼくのことそう言ったの？ このぼくが？ チャーリー・ブラウンが？ ならず者？ このぼくが？
④あんなに幸せそうな人の顔、見たことないわ
(1952年2月16日)

①お水ほしいはノはタメイキ
②青いコップがいの！ そんな赤いコップじゃダメ！
(1952年2月15日)

初 期のチャーリー・ブラウンは、ときどきちよつとしたいたずらっ子になった。シュルツいわく、「彼を主人公のひとりにしようと思ったものの、最終的にどのような性格になるのかなんてわかりません。彼は結果的にそのような敗者になりましたが、最初からそう決めていたわけではない。何年も描いていううちに、漫画のキャラクターは変化していきます。どう変わっていくのか、よくわからないものです。」

“コミックの中心にある、軽い残忍さやなにげない卑めにはわくわくさせられた。『ピーナッツ』は面白いだけではなく、感情表現もリアルに思えた(当時、このようなのは他になかったのだ)。「ピーナッツ」にはたまに悲しくするような場面もある……けれど、その暗さを相殺するのが、親しみやすい作画スタイルや面白いジョークの数々、元氣にぶつかる落語もも価値があるからという思わてくれる子どもも時代、人気はこうなる様式だ”

— マット・グレイニング『完全版ピーナツ全集』第3巻「序」



①「チェッ! マヌケ兄貴のスパイクを町へ連れ出した
ら、いちばん初めに出会った女の手とさっさと握る
ちまった...」
②「まあ、いいさ。酒場へ行ってドーナツでも食べよう」
③赤十字の女の子に話し相手がいるかもしれない...」
④「ベル!!!」
(1981年5月7日)



①「第一次世界大戦の撃墜王が敵と味
方の中間地点で兄を探している...」
②地雷のあけた穴にあり、鉄条網を
かいくぐり、砲台から手を振って...」
③「スパイク! どこにいらんだ? ス
パイク!」
④「スパイク?」
(1981年5月2日)



①「孤獨な第一次世界大戦の撃墜王が
小さなフランスのカフェに座って
いる...」
②「カートビヤ、お持ちどうぞ、ムッソ
ニー」
③「ほくちしちゃった! また悲劇的
なロマンスの始まり(ためいき)
だ...」
④「半生に4回離れかつフランスにいない
のに、もう7つも悲劇的なロマン
スを経験しちゃった!」
(1985年2月11日)

1970年代、スヌービーは大小屋で大堂を駆けてレ
ッド・バロンと戦うよりも、ウッドストック
と遊んでいる時間のほうが多くなった。だがシュルツは、読者
が第一次世界大戦の撃墜王の冒険をもっと読みたがっている
ことを知っていたのだろう。80年代になると、シュルツはビー
グルに「制服」(ヘルメットとスカーフ)を着せるにとどめて、バ
リの街を駆けまわせた。このころにはすでに登場していたス
パイクは、寂れた歩兵として登場した。またシュルツは1976
年に、スヌービーとスパイクの女きょうだい、ベルを登場させ
た。ベルは第一次世界大戦の空想世界では、戦線近くで働く赤
十字の看護婦の役を演じる...そして、ペーペーメント・パティ
の友人、マーシーは近くにバーテンダーだ。どこか奇妙に
思われるかもしれないが、これはスヌービーの空想だ...スヌ
ービーの好きなように物語を演出できるのである。

“ペートーベンの誕生日を創りました。ライナスと安心毛布を創りました。レッ
ド・バロンの追跡を創りました。フットボールを引っこめるのを創りました。カ
ボチャ大王を創りました—これらのすべてが、ひとつひとつ、漫画を作り上げ
る要素です。机に向かって、「漫画を描こうと思うんだけど、主人公はこれにし
よう」と決めればいいわけではありません。漫画にとって主人公が誰であるう
と関係ないのです。本当に必要なのはシチュエーションで、そこから始めるべ
きなんです。そこから始めたいと思う人はいませんけれど。みんなが最初にや
りたがるのは、商業的に目を引いてぬいぐるみとして商品化しやすいキャラクタ
ーを考え出すことなんですよ。でもそれは間違いです”

—チャールズ・M・シュルツ

“連載開始から30年以上経つ時期でありながら、依然として作品から新鮮さが失
われていないようだ。「慣れすぎは偽りのもと」などと言う人は、日々の4コ
マ漫画を何年も読みつづけた経験がないのだろう。ルーシーは相変わらず頑固
で、チャーリー・ブラウンはすぐに負け、スヌービーは自分の頭ひとつで、ある
いはタイプライターや小鳥の友人たちとともに、途方もない想像力を発揮する”

—レナード・マルティン
『完全版ピーナツ全集』第17巻「序」